

永井龍男
全集一

講談社

短篇小説 I

永井龍男全集 第一卷

昭和五十六年四月十七日 第一刷発行

著者 永井龍男

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二

郵便番号 一一一

電話 東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

振替 東京八―三九三〇

定価 四二〇〇円

装幀 原 弘

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 島田製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

©Tatsuo Nagai 1981, Printed in Japan

目 次

活版屋の話		9
蒼空の下に		12
出産		18
黒い御飯		33
新しい電車		38
泉		43
火		50
絵本		52
アトリエの女		56
巢の中		62
菜の花		68
麻布		78

今年も来年も		84
息子		88
ウエルカムと水瓜		97
妙高山麓		107
手袋のかたつぽ		119
往来		138
竹藪の前		152
唐辛子		170
胡桃割り		182
麻の上着		193
自転車風景		201
「あいびき」から		208

ペロツケ
.....

226

ある夏まで
.....

244

へちまの棚
.....

274

朝霧
.....

292

花火
.....

312

菊と飛行機
.....

323

バスデイ・ブック
.....

341

子供のアルバム
.....

354

水仙案内記
.....

368

点呼通信
.....

382

望楼
.....

388

青電車
.....

391

ある供養

.....

406

うねり

.....

415

あとがき

.....

427

解題

.....

441

永井龍男全集

第一卷

活版屋の話

ある場所で寄席の話が出た時に、煙草屋の主人のTさんがこんな話をした。
Tさんはもうかなり年輩の部に入る人で、今では大きい三人の息子のために、ゆっくりと生活していられたる身の上である。

私がA活版所へ、和文の植字工として勤めて居た頃でした。恰度、今の婆さん（妻）を貰って四年目の事だったと思って居ます。物価の割り合いもありましたが、その頃の日給は到底お話に成らない程でした。一日正直に働いてやっと七十銭ばかりも、貰って居たでしょう。婆さんも千に付いて、何錢という内職をやって居ました。その頃の私達夫婦、確かに他^{ほか}から見えていた人達はなにを楽しみに生きているのかと考えたに違いありません。その当時は黙々と働く婆さんを、苦いことに思っ居ましたが、今考えて見るとよく自棄を起こさなかったものだったと、身ぶるいが出て来ます。何しろ幸福などという事は夢にも見得る様な日は一日も、一時間もなくあったのですから。その頃の生活状態を思わせるにこんな話も有ります。私の従兄弟の一人に、私達とは余りに飛び離れた裕福な暮らしをして居るのがあるのです。それが夫婦とかみさんの妹と三人連で、私の家にやってきた事がありました。たしか良助の生まれた祝いにであったと思います。が、さてその三人の客に、茶碗として形のそろったものを三つ出す事が出来ないという有様なんです。その対照とし

ての客が殊に裕福で有つたために、私達の貧しさは一層骨身にこたえたのです。私はその場に居りませんでしたが、夜業から帰って、その話をばあさんに聞かされた時は、まったくこの世が厭になりました。又婆さんが非常に哀れな者に見えました。

大分話がそれましたが、さてそんな風な生活を二人して四年もすごした、良助が恰度四つの初春でした。私と婆さんと良助で近くの寄席へ行きました。そんな生活をしている者が寄席へ行ったのは訳のある事なので、それは活版所へ勤めてから五年間一日も欠勤したことがなかったために（と云って休んでは食って行かれましたものですから、はゝゝゝゝ）年末賞与として金五円也を社から給与されたのです。その時の五円ですから私一家に取っては涙の出るほどの大金だったのでした。心の内から喜びというものを取り去られたような婆さんも心から嬉しそうでした。良助をあの時ほど可愛いく、又頼母しく思った事は無かったと時々婆さんが思い出して話します。私も小さな四角の火鉢にあたりながら、あれと互いに買物をゆずり合った事などを思い出します。

こんな訳で、正月の十五日？ に近くの寄席へ行つたのです。

寄席へ入りますと、婆さんは何しろ五年來での今日なのですから氣後れがしたようでしたが、良助の喜んだの何んのって、分かりもしないのに、人が笑うと間のぬけた時分に頓狂な笑い声を立てるのです。

その内に、××と云う人が高座に登つたのです。そうして何かの芝居話を始めました。

役者の真似をやって居ましたが、今度はお客のつもりで、「音羽屋」「成駒屋」と云つた風に賞めました。すると、この時です。立ったまま、すいとられた様にこの落語家はなしかの口先きをじっと見詰めて居た良助が、

急に前の手すりに掴まって（そこは二階席だったので）身がまえると、

「活版屋！」

と、力任せに言い放つたのです。子供の声はよく響きます。聴き手はどっと笑いました。全身へ三角形の細粒を押しつけた様な感じと一しょに、毛穴から汗がにじみ出ました。その笑いは唯良助の言い放った言葉

が子供らしく滑稽だったのだからでしょうが、私達夫婦にとってはそれがどんなに気恥しいものに響いた事でしょう。お客の笑いがおさまると私の心はただもう自らの職業を嘲ける声に満ちて居りました。その頃活版屋の職工と一口に云われたらどんな程度までにさげすまれて居た事でしたらう！ 私は何も忘れて手すりの下の灰はたきを見詰めて居ましたが、落語に笑ったお客の声に思わずびくっとしました。

良助は落語家の云った、音羽屋、成駒屋が自分の唯一つ、こんな時口から出るまでに覚え込んだ活版屋という事とが同種なものであると思つたのでしょうが、私はみじめな生活の影響として何時か活版屋という事を口走る様になったのを思うと、益々自らを嘲ける心が激しくなるのでした。なぜか自分一人でどこかへ逃げたい様な氣になつて来るのでした。

中入りを待つて良助の厭がるのを無理に外に出ました。ほてつた頬に冷たい風が心地好く吹き渡りました。松の取れて間の無い寂しい町を、私も婆さんも無言でただ良助が時々云う片言を感傷的な氣分で聞き流しながら歩きました。そこから家に行く間にさびれた縁日が出て居ましたが、良助がその屋台見世で玩具をねだりました。私はその内で上等な、いつもなら驚く様なのを買つてやりました。

蒼空の下に

古い低い、雨水に湿りがちな所には陰気な苔さえも吹き出している、それだけを見ていても妙に気の滅入ってしまふような煉瓦塀の入口に、北陸孤児院の五字がようやく見分けられる、古い看板が掛っていた。その木看板もそこへ掲げられてから、よほどの月日を経ているらしく、上の釘に掛けられた所から一直線に赤い錆が流れていた。正門を入ると、極くそまつな東屋あずまや風なものが右手にあって、そこから十間ばかり、暗い立木の間を入った処に、不幸な子供達を囲んでいる煉瓦塀より、もっともつと冷淡な感じのする、まして日の目見ずの煉瓦の建物が、寂しい白い粉を表面に吹き出して、秋晴れの朝の蒼空の下に、大きな影を置いてひっそりと在った。

裏へ廻ると、そこには一寸した広場があった。物干し用の柱が二、三本立っている。雨上がりの朝の蒼空へ、真四角な煉瓦の煙突が茫然何かを見詰めた様に突っ立っているのは、本館から一寸出張った炊事場から出ている。L字形をしたこの建物の内でここだけは南に面しているから、まともに朝陽を浴びて、かすかに水蒸気が上っていた。

院長とは名ばかりで年に二、三度しか顔を見せず、実際は三人の班長の内の木内という、来年は六十に達する、口の大きな、頭を真二つに分けた人が、事務その他を司どっていた。他に、いつも古びた紋付の羽織を着ている男と、これは女で、といっても、もう四十に近い人、それらが二十余人の院児を指揮していた。

二十人の院児の他に一人特別な老人が一緒に生活していた。老人は名を何々藤助とか云って、その年の春百円に近い金を持って、この院へ頼って来たそうで、この金はいらないから死ぬまで子供達と一しょに暮らせて貰いたい、これがその時の条件だった。始めの内は班長達も責任があるので断ったが、余り老人の態度が痛々しかったし、養老院といっても、県内にはなかったもので、そのまま黙許されたのだった。それに百円という金もあるし……。多くの孤児と同様、藤助にも頼るべき親身の無いのはいう迄もない。二十人の孤児も、皆世間の荒浪にもまれ、そっけない孤児院生活の為に、ひねくれた性格の持主だった。

班長の大山が風邪にかかって三日ばかり寝て仕舞い、行商に出られなかったあげく、その上の二日もの雨降りは院にとって大きな損失だった。雨のからりつと霽れたこの日は、待ちあぐんだ様に早くから遠い町へ出張った。院は滅切り寂しくなっていた。

院児は皆外へ出た筈なのに、ガラス窓のすぐ下のテールで、紙質の極く悪い帳面へ何か一生懸命、指先きへ力を入れて書いている少年は、先達六里ばかり離れた、大きな町へ商いに行つて、夜晩くなつたので汽車で帰るべく停車場に入つた時、誤つて足を怪我した十二になる善吉という子だった。運搬車に積まれた荷が角を曲がつた時、恰度居合わせた善吉の足へ落下した。幾何の金で事はすんだが金は班長の手に入ってしまったらしい。たった一人で落着いて家などに居たことのない善吉は、班長達の眼がないので一層嬉しかった。体がしんからゆったりして、ゆったりした体につつまれた心の内では、何とも云うことの出来ない喜びがおどっていた。何か、なんでも好い、良いことをして見ないではいられない気がして、彼は毎晩やる算術の復習をやつて見た。しかし、ものの三十分も経つとやっぱり厭きてくるのだった。かえつて、頭が静けさに負けてしまつて、計算などはびつたり考えられなかった。

彼は外へ出た。外へ出ても訳のわからない嬉しさが心を弾ませ、足の傷が歩き過ぎたりした後余計痛むことは知っていたけれども、そんなことを考へてはいられないほど、そこらを軽々と駆け歩いて見たかつた。

善吉は院の裏手の日向へ行つた。もう十年も前に造られたらしい煙突は、ある敵めしきをもつてまるで何かを見詰めた様に立っていた。そしてその下には、新しく造られたものらしい雑な長縁台が秋の日光を反射していた。院と田地との境の林は、昨日の雨で黄ばんだ落葉樹の葉は大方散りつくしていた。散った落葉は褐色に小さく丸まって沢山地面に落ちていた。枝を透して、遠く連なつた山々も秋だった。善吉は縁台へ腰をかけた。のびのびした気分では暫くじつとしていた。日光の細かい分子が善吉のしんの疲れた体へ少しずつ染み込んで行くと、彼は微なけだるさを感じ出して、縁台の上へ横になった。すると、急に低い地の底から高所を見上げている様な快い感じになった。眼をつむっていると自分の肉体が静けさの中へとけ入るような気持になった、……しかし、暫くすると板の上に横たわつた体に痛みを感じた。たえられなくなつて彼は起き上がった。起き上がる拍子に軽い眩暈を感じた。とその時、妙にひつっこい云い様のない臭い^{にお}を、自分の着物からかいだ。日向臭い、と彼は思った。軽い眩暈とその臭いで、虚弱^{ひよわ}い体はこれ以上陽に照らされるが大変苦痛になった。頭に両手をあてて、眼をまぶしそうに忙しく瞬くと、低い駒下駄をずるずると突っかけて、煙突の後ろ側の方へ入つて行つた。乾き初めた落葉がかすかな風にもこそそと地をすべつた。

暫くすると、静かな、まるで深山の奥の様な院の裏手の日向へ、重そうな黒地の外套を着た老人が、いかにも疲れ切つた足どりで、何時どこから入つて来たかと疑う程こつそりとやつてきた。片手には新聞紙に包んだ物をさげ、片手には太い杖を握つて、よぼよぼ日向の縁台の所へ向かつて行つたが、今まで堪えて来た全身の力を、溜息と一緒にげつそり抜いてしまうと、縁台へ腰を下ろして、油気の微塵もない、とげとげしい手で腿から膝、膝から脛へかけてなでおろした。云うまでもなく藤助老人だ。老人はひる近い陽につつまれながら、縁台に置いた包み物を膝の上にのせると、爪の厚い指先で紐をほどき出した。自由のきかない指先でたんだ念に紐をといて新聞紙を開くと、中には何々膏という、そうした売薬には有り勝ちなみずばらしい紙袋に包まれた膏薬が一つ、もう一つ小さなふくらんだ袋が入っていた。老人は指先で膏薬を小さく